

注 17 注 6 と同書
 注 18 注 3 と同書
 注 19 注 9 と同書
 注 20 樋口芳麻呂「第二章平安・鎌倉時代散逸物語の研究 第五節
 「朝倉」物語」「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(ひたく書
 房)昭和五十七年二月
 注 21 樋口芳麻呂「物語歌合と物語歌集」「和歌と物語」(風間書
 房)平成五年九月
 注 22 鈴木弘道「後代物語への影響」「源氏物語講座 第八巻」(有
 精堂)昭和四十七年
 注 23 松尾聰「一六朝倉の物語」「平安時代物語の研究」(東寶書
 房)昭和三十年六月
 注 24 石川徹「第二十三章 「心高き」を主題とする作り物語の系
 譜」「平安時代物語文学論」(笠間書院)昭和五十四年四月
 注 25 石川徹「第十章 平安朝に於ける物語と和歌との相互関係に就
 いて」「古代小説史稿」源氏物語と其前後」(刀江書院)昭
 和三十二年五月
 注 26 注 25 と同書
 注 27 注 25 と同書
 注 28 辛島正雄「「名のりをしつゆかぬ」女君の物語」「朝倉」物
 語管見」『論集源氏物語とその前後 3』(新典社)平成四年
 五月
 注 29 注 25 と同書
 注 30 今井卓爾「第六章 散佚物語の研究」「物語文学史の研究 後
 期物語」(早稲田大学出版部)昭和五十二年六月
 注 31 注 3 と同書

注 32 注 5 と同書
 注 33 注 20 と同書
 注 34 小木喬「第一章総説 第一節物語史概説」「散逸物語の研究
 平安・鎌倉時代編」(笠間書院)昭和四十八年二月

朝顔巻を読む ―源氏の心情を通して―

1、平成八年度中古自主ゼミ前期討論のまとめ

―朝顔の姫君は何故結婚を拒否したのか―

平成八年度前期の中古自主ゼミでは、『源氏研究』第1号「王朝文化と性」特集(1)を足がかりに、朝顔の姫君の結婚拒否について発表と討論を重ねた。

1、源氏物語の中における朝顔の姫君の位置づけ

朝顔の姫君は、賢木巻から七年を経た朝顔巻で物語世界に再登場する。この唐突な再登場は、紫の上を「ゆさぶる」ための方便であるとされる(2)。すなわち、藤壺、葵の上、六条御息所のすでに亡い朝顔巻現在、紫の上は、源氏に対しても社会的にも不動の立場を得た。物語は紫の上を春の町の女主人とする六条院の繁栄に向かってつき進んでいるが、その一方で紫の上は、その登場の始発から昔物語的な理想の女主人公として位置づけられ、その造形は多分に観念的であった。その紫の上を物語世界において源氏の好配偶たるにふさわしい、深い内面をもった女主人公として物語世界に「据え直す」ため、朝顔の姫君の再登場は起こった。朝顔の姫君への源氏の懸想は、紫の上に今までにない不安動揺を与えて

中古自主ゼミ 小山香織

「ゆさぶ」り、自己の心中を見つめさせるためのものであったとされるのである。

このように、朝顔巻における朝顔の姫君の存在は、あくまで紫の上に不安を与えるためのものとしてあり、源氏の結婚相手としてではなかった。朝顔の姫君が源氏と結婚した場合、その格式の高さから源氏は彼女を正妻とせざるをえないが、そうなれば、紫の上を女主人とする六条院構想はうちくだかれてしまうからだ。それゆえ、物語世界において、朝顔の姫君が源氏と結婚することは決してなかったということがいわれている。

2、朝顔の姫君の結婚拒否の理由

前節で述べたような物語の要請はそれとして、中古自主ゼミでは、朝顔の姫君そのひとに、結婚拒否の理由を読みとろうと試みた。

まず第一に、坂本和子氏の「斎院は、賀茂神との信仰関係によって、もはや他氏族との結婚は認められなかったものではあるまいか。崇り神としての性格を有する賀茂神の怒りに触れぬよう、朝廷も気をつかったであらう」(彼女(朝顔の姫君)は、「なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしことと神やいさめむ」と詠んで源氏を却けた。一度賀茂の神に仕

えた者は、斎院を罷めて後も猶、神仕えにあつた者として清浄な生活をせねばならないというのが朝顔君の気持である。(3)という御指摘に導かれたつ、朝顔の姫君の「前斎院としての自覚」が結婚拒否の理由として挙げられた。

第二には、朝顔の姫君の「内親王格の王女としての自覚」が挙げられた。知られるように、継嗣令において、内親王が臣下に降嫁することは原則として禁止されており、源氏物語内にも「皇女達の、世づきたる有様は、うたてあはあはしきやうにもあり」「皇女達は、ひとりおはしますこそは、例の事(若菜上)」「(4)といった内親王の結婚を好ましくないものとする考え方がみてとれる。

朝顔の姫君は、桃園式部卿宮の姫君であり、女王であつて内親王ではない。だが、式部卿に任ぜられる親王が「皇太子に準ずる皇族の長老格」という時代史的イメージを持つていることから、式部卿宮家の姫君は内親王に準ずる格式を持ち、だからこそ、内親王が任ぜられることを原則とする斎院にも選定されるのではないかと(5)。彼女はそうした自身の身分を考えて、源氏の求婚を拒んだのだらうと自主ゼミでは考えた。

最後に、「朝顔の姫君自身の意思」ということを、自主ゼミで話し合つた。朝顔巻中での源氏との最後の対面の際、朝顔の姫君は次のような感慨を洩らす。

げに人のほどの、をかしきにも、あはれにも思し知らぬにはあらねど、「もの思ひ知るさまに見えたまつると、おしなべての世の人の、めできこゆらむ列にや思ひなされむ。かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまを」と思せば、「なつかしからむ情もいとあいなし。よその御返りなど

彼女が当時の女性に課せられた女性性から自由であり、また作者がそのように造形したこと証となりうるだろう。

そして実際、朝顔の姫君の結婚拒否は読者に強い衝撃を与え、それではないが、同じ源氏との結婚を、大義名分がないままに拒否した空蟬のようにには否定的評価を与えられていないのである(8)。

II、源氏は何故結婚をあきらめたのか

―源氏の心情を通して朝顔巻を読む―

中古自主ゼミでは、章に述べた討論をふまえ、各自で発展させた朝顔の姫君論、あるいは朝顔巻論を、夏期休暇中に行われた軽井沢ワークショップで発表した。その中のひとつを報告したい。

物語の要請として、源氏と朝顔の姫君の結婚はあつてはならないことであり、朝顔の姫君は「結婚拒否」という女性性をもって造形されている。一方、源氏は、少なくとも結婚に関しては、当時の支配者、所有者としての男性性の範疇に収まっている人物である。この源氏が、何故、朝顔の姫君と無理やりにでも結婚しなかったのかということを、朝顔巻の表現に即して考えた。

1、源氏が朝顔の姫君に求婚した理由

源氏が朝顔の姫君に粘り強く求婚を続けた理由として、第一に「源氏の意地」ということが挙げられると思われる。

斎院は、御服にておりゐたまひにきかし。大臣、例の思しめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ

はうち絶えて、おぼつかかなるまじきほどに聞こえたまひ人づての御いらへはしたなからで過ぐしてむ。年ごろ沈みつる罪うしなふばかり御行ひを」とは思し立てど……(朝顔)(6)

こうした彼女の独白から、自主ゼミでは、朝顔の姫君は源氏に惹かれてながらも、恋愛関係を結ぶことを拒否し、源氏と文通による「性を超越した関係」で結ばれることを望んでいたのではないかと考えた。

3、新しい女性性をもった女性としての朝顔の姫君

前節までに述べたような討議を重ねたのち、朝顔の姫君は、その時代において、結婚によって結ばれる男性／女性の関係が、すなわち支配／被支配、所有／被所有の関係であること(6)に自覚的であり、それゆえ、そのような関係に陥らないために、当時の女性に求められた女性性から逸脱し、結婚を拒否したのではないだろうか、という見解へとゼミ全体の意見が収束していった。

なお、朝顔の姫君のこうした自覚はそのまま作者自身のものであつたと思われる。作者は意識的に、朝顔の姫君を結婚拒否の女性、つまり新しい女性性をもった姫君として造形したのである。そしてまた、作者はそのような女性が当時の読者に受け入れられにくいことをも知悉しており、結婚拒否の大義名分となりうる前斎院、式部卿宮家の王女といった特質を、朝顔の姫君に付与したのでらうという結論をもって、自主ゼミの討議のまとめとした。

加えて、女性が「見られて」美しい(身体)であることを要求される(7)この時代に、朝顔の姫君は源氏物語の姫君としてはほとんど唯一の、身体描写を全くといってよいほどされない姫君である。このことも、

宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。(朝顔)

なほかく昔よりもて離れぬ御気色ながら、口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。(朝顔)

ここに引用した部分からは、帯木巻から十五年間に渡る源氏の懸想が、まったくとりつくしまがないというのではないけれど一向に靡く様子もない、という朝顔の姫君との根比べの様相を呈していたことが伺える。源氏は彼自身の意地として、この根比べに勝ちたかつたのだらうと思われる。

第二の理由として、源氏がステイタスとして「前斎院」を妻とすることを求めたということがいえると思われる。『賀茂斎院記』によれば、源氏物語成立以前に斎院に任ぜられた十六人のうち、退下後、天皇の後宮に上つたのは二人、臣下に降嫁したのは一人である。(源氏物語以後は、十九人中、二人が入内、一人が降嫁)。これより、斎院は退下後も独身を守るのが最も好ましく、結婚する場合もその相手は天皇であることが原則であつたと考えられる。源氏は、こうした「前斎院」である朝顔の姫君と結婚することで、自身を天皇の位に准えようとしたのではないだろうか。

最後に、源氏の朝顔への思慕には、藤壺を亡くしたための心の痛手を埋めるという意味があつたのではないかと考えた。

藤壺を喪つた源氏の心は、非常に不安定な状態にあつたものと考えられる。しかしそれを人に悟られるわけにはいかず、源氏は常に気をつかっている。

ほのかにのたまはするも、ほのぼの聞こゆるに、御答へも聞こえ

やりたまはず、泣きたまふさま、いといみじ。などかうしも心弱
きさまにと、人目を思し返せど……
(薄雲)

人の見とがめつべければ、御念誦堂にこもりぬたまひて、日一日
泣き暮らしたまふ
(薄雲)

何かをうしなつて心の平衡を欠いてしまったとき、それに代わるもの
を探そうとするのは、人間としてごく自然な行為であろう。とくに源氏
の場合、藤壺を喪つたために平衡を欠いたその心を、人目に触れさせな
いために、なるべくはやく修復するか、修復がかなわなければ別の原因、
たとえば藤壺以外の女性への恋になやむ故のアンバランスな心理状態と
見せ掛け、カモフラージュする必要があつただろう。だから、このよう
な代用とカモフラージュの役割が一体となつた“埋め草”を求めようと
する源氏の気持ちは、それが意識されていたかはいかは別として、か
なり大きいものであつたはずである。

第一の埋め草として源氏が求めたのは、前斎宮である秋好中宮であつ
た。藤壺が亡くなつた年の秋、里下がりした秋好中宮に源氏は思いを打
ち明ける。

このあと、藤壺への懸想と秋好中宮への懸想とが、源氏の中で同列に
並べられていることから、秋好中宮は藤壺の埋め草として、一時、源氏
の心にとらえられたということが推測できるのではないか。

これはいと似げなきことなり、恐ろしう罪深き方は多うまさりけ
めど、いにしへのすきは、思ひやり少なきほどの過ちに、仏神も
ゆるしたまひけむと思し冷ますも、なほこの道は、うしろやすく
深きかたのまさりけるかな、と思し知られたまふ。
(薄雲)

だが、源氏は秋好中宮の沈黙に会い、御前を退いたあとで、右に引用
したように自分の恋心を反省する。

らめた理由について考えてみる。少女巻冒頭には、源氏の心境が次のよ
うに記されている。

かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人
の御気色のうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやう
にあながちなるさまに、御心やぶりきこえんなどは思さざるべし
(少女)

前節で第一に挙げた「源氏の意地」という理由には、右に引用したよ
うに、「あながち」な結婚では彼の意地の満足にはならないから、とい
うことが対応すると思われる。

第二に挙げた、「ステイタス」として朝顔の姫君を欲した」という理由に
は、朝顔の姫君と結婚しなくとも彼女を六条院文化圏にひき入れること
は可能である、ということが対応すると思われる。のちに源氏は朝顔の
姫君に、明石の姫君の入内の際の嫁入道具として香合、草子の執筆を依
頼し、結果として彼女を六条院文化圏の一員とし、娘明石の姫君の簪付
けとした。また、源氏は、前斎宮秋好中宮を養女として引きとることで、
やはり六条院文化圏の一員としている。源氏は前斎院、前斎宮という二
大ステイタスをもつた女性たちを、妻とはできないまでも両方ともに、
自身の主宰する文化圏内にひき入れることで十分満足しえたのではない
か。

最後の、「藤壺の“埋め草”として朝顔を求めた」という理由には、藤
壺を亡くした痛手を埋めるのに最もふさわしい相手は、やはり藤壺の“
ゆかり”であり“形代”である紫の上であることに気づいたということ
が対応すると思われる。

朝顔の姫君への慕情に胸が満たされた状態から、やがて彼女への求婚
を思い留まるまでの源氏の心情の変化を、朝顔巻の後半の本文に即して

そして、源氏は次なる埋め草として朝顔の姫君への求婚を開始するの
である。付け加えれば、第二に挙げた理由と関連して、ここで源氏の中
には前斎宮から前斎院へ、という連想があつたかもしれない。朝顔の姫君
と秋好中宮とは源氏の意識の中で同列に据えられていたかもしれない。

だとすれば、先に述べたように藤壺と秋好中宮が同列にあることは推測
できるので、藤壺、秋好中宮、朝顔の姫君の三人は、源氏の意識の中で
同一直線上のものとしてとらえられたともいえるのではないだろうか。

皇后、斎宮、斎院は、ただの位ではなく公職としての側面ももってい
る。紅葉賀巻に、藤壺の歌に対する「他の朝廷まで思ほしやれる、御后
言葉のかねても」という源氏の感想もあり(9)、重責を強いられる立場
につくことによつて生まれる、人格の深みとでもいうべきものが、彼女
たちには共通してあつただろうことがうかがえる。源氏は三人のそこに
惹かれたのではないだろうか。そしてそれは、藤壺の“ゆかり”であり
“形代”であるはずの紫の上も、肩代わりできないものであつたのだら
う。

以上のことから、朝顔巻における源氏の朝顔の姫君への思慕は、藤壺
への思慕が変形し、カモフラージュされたものだったということがいえ
るのではないだろうか。

藤壺の死、秋好中宮への懸想、朝顔の姫君への懸想という、実際には
源氏三十二歳の年の春と秋と冬に起こつた三つの事件が、物語において
近接して語られているのは、このことを示しているように思われる。

2、源氏が求婚をあきらめた理由

ここでは、前節に対応させながら、源氏が朝顔の姫君への求婚をあき

追つてみる。左に挙げたのは朝顔巻中での朝顔の姫君と最後の対面のの
ちの源氏の心境である。

今さらの御あだけも、かつは世のもどきをも思しながら、「空しか
らむはいよいよ人笑へなるべし。いかにせむ」と御心動きて、二
条院に夜離れ重ねたまふを、……

源氏の心境は、朝顔巻前半の流れにそつた、朝顔の姫君と結婚しなけ
れば世間の笑いものだという、かなり切羽詰まつたものである。この源
氏の様子に、紫の上は動揺する。

女君は、たはぶれにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこ
ぼるをりもなからむ。「あやしく例ならぬ御気色こそ、心得がた
けれ」とて、御髪をかきやりついついとほしと思したる。

源氏はここではじめて、紫の上の立場に思いいたり、彼女をかわいそ
うに思う。

「宮亡せたまひて後、上のいとさうざうしげにのみ世を思したる
も、心苦しう見たてまつり、太政大臣ものしたまはで、見ゆづ
る人なき事しげさになむ。このほどの絶え間などを、見ならはぬ
ことに思すらむも、ことわりにあはれなれど、今はさりとて心の
どかに思せ。……」

源氏は言い訳としてまず一番に藤壺を登場させる。源氏の心が藤壺を
亡くした痛手からまだ立ち直っていないことをうかがわせる。だが、ま
だ紫の上の心を聞くことはできない。

いよいよ背きてものも聞こえたまはず。……常なき世にかくまで
心おかるもあぢきなのわざや、とかつはうちながめたまふ。

「斎院にはかなし」と聞こゆるや、もし思しひがむる方ある。そ
れはいともて離れたる事ぞよ。おのづから見たまひてむ……うし

るめたりはあらじと思ひなほしたまへ」など、日一日慰めきこえたまふ

今まで「女五の宮のお見舞いに」などと紫の上に対して言い逃れをつづけていたが、これで逃げ道はなくなるという覚悟をもって、源氏は「朝顔と結婚する気はない」ということを口に出したと考えられる。そして、このことを源氏にととう言わせたのは、紫の上の不安にうちひしがれた様子であることに注目したい。源氏は、紫の上のために、朝顔の姫君との結婚をあきらめたのだ。だが、まだ朝顔の姫君への未練は完全に断ち切れていない状態であることが、「かつはうちながめたまふ」という表現からうかがえる。

こののち、有名な雪まらばしの場面が描かれ、源氏による藤壺礼賛、紫上批評、朝顔批評が繰り広げられる。

「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたる事なれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしか。……世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。前斎院の御心ばへは、またさまことにぞみゆ。さうさうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあたり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ」とのたまふ。

この場面において、源氏ははじめて、完全に朝顔の姫君のことを思い切ったのだと思われる。源氏が朝顔の姫君を諦めた理由は、紫の上を前にして藤壺のことを語るうちに、あらためて紫の上が藤壺の「形代」で

あることを深く実感し、源氏自身の中で、紫の上を「紫のゆゑこよなからずものしたまふ」女君として据え直したからだろう。そして同時に、「紫のゆゑ」をもたない朝顔の姫君は、藤壺・紫の上とは「またさまこと」な、文通によってあはれを共有できる女性として源氏自身の中に据え直されたのだと考える。

また、源氏のこの台詞のあと、はじめて紫の上の発語が記されていることに注目したい。これは、紫の上がこの源氏のことを信じてはじめて不安を解いた、言い換えれば、それだけ源氏のことばが真情あふれるものであったということではないか。

続いて、臘月夜、明石御方、花散里の評ののち、紫の上と源氏は唱和する。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

こほりとち石間の水はゆきなやみ

そらすむ月のかげぞながるる

外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。

鶯鶯のうち鳴きたるに、

かきつめてむかし恋しき雪もよに

あはれを添ふる鶯鶯のうきねか

紫の上の歌を、叙情歌ととるか叙景歌ととるか論議のわかれるところである。だが、少なくとも源氏は、雪まらばしの場面で「冬の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ……」と冬の月を愛でた自分に、紫の上が素直に従って詠んだ叙景歌である、ととらえたと考えられる(10)。そして源氏は、その紫の上の素直さを「似るものなくうつくしげ」に感じる

のである。しかしそのあとすぐに、源氏が依然として、紫の上の藤壺に生き写しであるところにひかれていることが強調されているのに注意したい。源氏の歌でも、「鶯鶯のうきね」、つまり源氏と紫の上の夫婦仲は、「むかし恋しき雪もよ」、すなわち藤壺との思い出に、「あはれを添ふる」ものであるとされている。あくまで藤壺が主にたち、紫の上は従なのである。

このように、源氏は、紫の上の心中、立場を思いやって、朝顔の姫君への求婚をあきらめたのである。しかし、源氏が朝顔の姫君をあきらめ、紫の上を選んだ決定的な理由は「紫のゆゑ」、つまり紫の上が藤壺の血縁であり生き写しであることだったと思われる。

3、源氏の心情からみた朝顔巻の位置づけ

——まとめにかえて——

前節で述べたように、朝顔の姫君は、源氏にとって藤壺の「埋め草」だったのではないかと考える。源氏の朝顔の姫君への思慕が、藤壺への思慕をすりかえたものであったとすれば、朝顔の姫君への執心を語る朝顔巻前半は、すなわち、その死後も断ち切りようのない、藤壺への妄執を語ったものであるともいえる。

ところで朝顔巻は、夢にあらわれた藤壺を思って源氏が詠んだ歌によって閉じられていた。

阿弥陀仏を心にかけて、念じたてまつりたまふ。おなじ蓮にとこそは、

なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむと思すぞうかりけるとや。

(朝顔)

針本正行氏は、この歌は源氏が「藤壺は桐壺院のものであり自分のものではない」と思い切った歌だと指摘されている(11)。ここから察するに、朝顔巻後半は、源氏が、藤壺への思慕にある程度の区切りをつけ、今彼の手に入りうるものもすべて藤壺に近い女性、言い換えればもつとも理想的な女性として、紫の上を源氏自身の心中に「据え直」していく過程を語ったものではなかったか。

朝顔巻以前では、紫の上が現時点での藤壺の最高の形代であることが、源氏には痛切には意識されていなかったのだろう。そのことを源氏が実感するには、「紫のゆゑ」を持たない朝顔の姫君という比較対象の存在が必要だったのではないだろうか。

源氏の心の中で、最上位を占める藤壺と「紫のゆゑこよなからずものしたまふ」ととらえられる紫の上は、彼が藤壺はすでに手の届かない場所にあることを実感した今、彼の手に入りうる最高の女君である。源氏自身、そのことを朝顔巻で深く実感したに違いない。少女巻で六条院世界の完成が語られるためには、六条院の女主人たる紫の上が、物語世界においてだけでなく、源氏の内面においても、今は亡き藤壺に次ぐものという留保つきではあるが、最高の女君としてとらえられていることが不可欠だったのだと考えられる。

しかしそのうえで、朝顔巻の語りは、紫の上が源氏の心中で藤壺に次ぐ女性としてとらえられるのは、あくまで「紫のゆゑ」によるものであることを再三念押ししているかのようである。そしてこのことが、若菜上巻に至って六条院世界の結びを招いたのではないだろうか。源氏は、「紫のゆゑ」を持たない朝顔の姫君を正室に迎えることは紫の上のためにあきらめたが、紫の上と同じ藤壺の姫であり、「紫のゆゑ」を持つ女三の宮の降嫁を断ることはしなかったのだ。

朝顔巻とは、源氏的心情に関していえば、六条院世界の完成のために不可欠な、紫の上の「据え直し」を語った巻であるのと同時に、その「据え直し」には六条院世界の崩壊の芽をもが内包されていることを語った巻であるといえるだろう。

そしてこのことは、朝顔の姫君のような、物語の要請にそって人物造形が行われる脇役的人物に対し、源氏の場合は、「藤壺を慕い続ける」という彼の人物造形によって、物語が展開させられていくという、源氏物語第一部における方法を端的に示しているものだといえるのではないだろうか。

注

- (1) 三田村雅子・河添房江・松井健児編集 源氏研究 1996・4
(2) 森藤(旧姓福田) 侃子 「権斎院について」

東京都立大人文学報 1963・3

秋山虔 「紫上の変貌」 国文学 1964・5

- (3) 坂本和子 「『朝顔斎院』論——賀茂の伊都伎女——」

国学院雑誌 1970・7

- (4) 源氏物語の本文引用は全て小学館『日本古典文学全集』による。

- (5) 川崎昇 「源氏物語の背景——朝顔の君をめぐる——」

国学院雑誌 1969・12

- (6) 注1前掲書

- (7) 注1前掲書 三田村雅子「黒髪の源氏物語」

- (8) 「朝顔の宮、さばかり心強き人なめり。世にさしも思ひ染められながら、心強くてやみたまへるほど、いみじくこそおぼゆれ。空蟬も。それもその方はむげに人わろき。後に尼姿にて交らひあたる、

また心づきなし」(小学館完訳日本の古典『無名草子』)

- (9) 後藤祥子 「藤壺の出家」『源氏物語の史的空間』

東京大学出版会 1986

- (10) 吉岡曠 「鴛鴦のうきね」 中古文学 1974・5 10

川島絹江 「紫の上の和歌——『源氏物語』の和歌の機能——」

『日本古典文学の諸相』 勉誠社 1997

- (11) 平成八年度国学院大学公開講座にての指摘

(付記) 本稿は平成九年度日本女子大学国語国文学会春季大会における

口頭発表をもとに補筆改訂したものです。